

三河アララギ

平成二十五年

三月号

第六十卷 第三号



ニューヨーク日記(77) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 24, 2012 : Champagne dreams

Blue Shoe Diaries



贅沢な!って感じでしょ?確かにそうなんだけど何ヶ月か前にネットで超お得なセールで「キャビアの試食&お店案内」みたいなもの売ってたの。本当に一口なんだろうな〜と思いながらも。スケジュールの都合が悪くそのクーポンも期限切れで私は諦めちゃっていたんだけどお店のそばを通った時に ShoeLady が「ちょっとまだ使えるか聞いてみよう!」っと。ダメもとで入ったら何と「OK!」っでもっとビックリしたのが写真に写ってるもの全てプラスウオッカのショット2個それから色々なキャビアを載せるトーストが出てきました。美味しかったよ〜!

It looks pretty luxurious, right? And that rose bubbly was a half bottle of Ruinart. So months ago, I got this deal at a flash sale site and paid what I thought would just give us a one bite sampling of caviar. With life getting in the way, we had actually let this coupon expire and I had given up on it. But today, when we passed by the store, ShoeLady decided to go and ask if they would still honor the coupon. And they did! So all this, shown in the photo, came and more! (selection of toasts and condiments, and 2 shots of premium vodka) Needless to say, we left happily satisfied.

目次

第六十卷第三号(通卷七一一号)

表紙 藪椿	今泉 由利 (1)	男泣き	清水 慶章 (27)
ニューヨーク日記(77)	Blue Shoe (2)	「うたやせ」	いーはとぶ (28)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	贈呈誌	(29)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	私の一首	
坦々として	岡本八千代 (6)		
御御御付け	今泉 由利 (7)		
小正月	弓谷 久子 (8)		
新しい年	青木 玉枝 (9)		
北陸の旅	佐藤 喜仙 (10)		
冬の向日葵	内藤 志げ (11)		
ちやんちやんこ	安藤 和代 (12)	子規の短歌革新とアララギの歌人(9)	植村 喜仙 (33)
乱るる心	伊藤 忠男 (13)	俳句	佐藤 喜仙 (34)
歳末歳始	林 伊佐子 (14)		公女 (34)
散歩	半田うめ子 (15)		一石 (34)
帽子	近藤 映子 (16)		喜仙 (35)
願ひ	清澤 範子 (17)		皓一 (35)
健気にも	胃甲 節子 (18)	「歴代天皇御製歌」(八)	貫名海屋資料館 (36)
枇杷の木の花	鈴木 孝雄 (19)	(九)	大橋 望彦 (37)
朧昆布	杉浦恵美子 (20)	ある自然科学者の手記(10)	今泉 雅勝 (40)
切り干し	堀川 勝子 (21)	絹の話(28)	一石 (40)
電子辞書	平松 裕子 (22)	物理学者と詩歌の世界(38)	鮫島 満 (44)
財賀寺	山口千恵子 (23)	短歌に詠まれた茂吉	山本紀久雄 (46)
春きざす光	小野可南子 (24)	楽しい時間(4)	夏目 勝弘 (48)
我が年末年始	夏目 勝弘 (25)	長塚節の病・恋・旅(1)	岡本八千代 (49)
雪よ	阿部 淑子 (26)	「水魚」のことから(146)	今泉 由利 (50)
蝉水	富岡 和子 (26)	ことのはスケッチ(41)	平松 温子 (52)
朝靄	白井 信昭 (27)	和菓子街道(77)	
		お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

老い痴れてやうやくゆとりのある如く吾に春近き黄金の日々

P
20

竹林の中にみづから枯れゆきし竹は傾きてつひに倒れず

P
21

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

山畑の畦は枯色まれまれに深き緑のあざみ平たし

老いてなほ若きところを持たまほし今日の向かうはかぎりなき明日

朝食の席の彼方の松の上にいまだ沈まぬ淡き満月

坦々たんたんとして

蒲郡 岡本八千代

けふの日は今日の己れの心にて水色坦々の空を仰げり

何事を知らせ来たるもたゞわれは坦々としてけふ照る日の中

青年の孫またひとり遠く遠く独り住居を始めたる新年

しみじみとうすくれなるの梅干茶啜りつつおもふお前の独りを

次の日も「すぐにつくれるおかず」の本読み読みてまた愉しかりにき

ある時は人を厭ひてある時は恕ゆるす心の湧きつつ暮るる

夫もわれも今を在ること恕ゆるしあはむ向き合ひて今宵ひそやかに夕餉

友の葬りきのふに過ぎて今朝の庭とところどころに春の霜白し

相逢へばまじめに語る一言さへ人を笑はす君は今亡く

いつにても別れは哀し君の名をけふは幾たびも呼びてつぶやく

御御御付け^{おみお}

東京 今泉 由利

花は無し葉つばも無くして桜木の枝先にあり花芽^{かが}と葉芽^{ようが}と

あの人もこの人もまた日本中同じ映像見てゐるならむ

オリオン座おおいぬ座とこいぬ座と冬の大三角見ゆる窓辺に

東^{ひんがし}に先ず輝やけり木星ははじまりはじまる冬の星座の

九条ねぎ熱海のわかめ祖母の味噌香りたちそむ今朝御御御付け^{おみお}

曾祖母を祖母を母を偲ぶ日は千六本のだいこん御御御付け

映像のホーキング博士と語りあふひとり部屋のふたり居ること

新しいものへと受け継がれゆくいとほしくして私の命

恐らくは私と同じき思考かと尺取り虫の尺取り進む

まん丸の虹の真中に飛行機の影ありその中私をりき

小正月

豊川 弓 谷 久 子

東雲は真紅く染まりぬ今年こそよき年なれと初日を待ちぬ

風邪引くなと逢ふ人ごとに優しくて八十五歳の我の正月

スエ先生と静誠様に夢で逢ふ夢の中のみ逢へる人びと

赤芽の枝に紅白だんご飾りたる日を懐しむ今日小正月

君在さぬ静かな門に侘助は今年もいっぱい花咲かせをり

少しだけ式部の世界に触れ来しと宇治の旅より子は帰り来ぬ

親よりもえにし深しか眠りゐる姉の口元そつと拭ひぬ

火鉢ひとつ家族で囲みし幼なき日母の手固く輝割れるたり

血圧よしと主治医の言葉草原に水仙の花摘みて帰らむ

この寒波何時まで続く冬眠の如く一日こもりて過ぐる

新しき年

新城 青木玉枝

新しき年を迎へて返り見る人生いろいろ夢もいろいろ

わが人生今年が一番悪い年一月下旬姉は逝きたり

六人の兄弟姉妹にただ一人この世に残され私も逝きたい

横たはるベッドに手をば握りしめ私わたしよと言へど分らぬままに

日曜日終れば隣りの高校の鐘の音ひびく音に安らぐ

立止る私に声かけコンニチは高校中学生の元気な声

古城跡に続く小径へ遠まはり手押車ておしに買物袋を乗せて

少子化の時代の山里全校生百名もなき学校幾つ

山里の冬の訪れ早くして朝夕の寒さ雪降れば解けず

気がかりの二、三はあれどそれなりに暮し重ねて早一年山里に

北陸の旅

東京 佐藤喜仙

盆休み東名高速下りたる車両の多く渋滞はげし

小牧より北陸道に入りにつけり夢のごとくに車走れり

賤ヶ岳十本槍のいにしへよりはるか琵琶湖の水面光れる

朝倉の城の礎石の整然と兵どもが夢のあととなり

蕉翁の俳求め山中の出で湯にひたり湯の香満喫

日本海荒波の削る安山岩屏風のごとく東尋坊とや

魚津より富山湾を望みたる海市は見えず真夏なるゆゑ

黒部川沿ふて進めるトロッコの眼下に白く滾る川すぢ

新潟の海は豊饒確かなり夕餉の膳に岩牡蠣のである

佐渡ヶ島碧き波間のかなたなり金と流人の島影おぼろ

冬の向日葵

豊川 内藤 志げ

ひまはりを師走の花にと嫗より種の届きぬ大鉢に蒔く

十二月向日葵の花冬の陽に芯まで明るむ黄の輝き

雲の間の日射しに黄に輝ける向日葵の花は太陽の花

仕事終へ厚き木綿の布切れを向日葵を覆ふ西風の中

寄せ植ゑの万年青おもとに朱の色一つ初めての色朱の円ら実

酒肴炬燵の部屋に整へて男の正月われは在所に

トタン屋根雨音激しひねもすを明りを灯し葱を束ぬる

作業場に集いの部屋に二人の部屋青果市場のカレンダーを張る

わが庭に小鳥の群れは稀れの稀れ目白にヒタキ庭隅に翔ぶ

窓に寄り小鳥の群に佇めり一勢に去る鴨よぎる

ちゃんちゃんこ

豊川 安藤和代

「ばあちゃんの植えた菊が咲きました」孫の便りの漢字も増えて

木枯しの三日続きて干大根ほど良き出来と友からの文

冬窓に向日葵咲かす友の技その花に似て強くやさしき

色褪せし母の形見のちゃんちゃんここの冬もまた背を温むる

孫娘の手作りケーキに胸熱く吾六十九歳誕生祝ふ

若水を口にふくめば甘くとも辛くとも感じ厳かに飲む

トランプも百人一首も孫に負けても幸せな正月三日

木枯しに激しく葉音震わせて柏葉しかと新芽を守る

とよ川に白さ清しき白鳥の今年は見つと会話寂しむ

墓石の御水の器に蟬氷御霊の喜びの如く光りて

乱るる心

大阪 伊藤 忠 男

病まだすべてが見えず待つわが身眠り浅きや年末の夜

人生の節目節目に勝負あり飛躍は勝ちて引き寄せるもの

試練また楽しむ心貴きや遊び心も時には救い

今年はと心を込めて手を合はす思わぬこの身神託すのみ

まだ床を離れ難きや冬鳥の鳴き声響く山里の宿

腹すかし眠れぬ夜も検査なら乱るる心増すばかりなり

弱気とは無縁と思う我なのに身体正直胃痛む日あり

お布団を丸めくるまる冬の宵心は何で温もり得るや

半世紀前の青春幻と言えればこれぞ今が青春

吐く息の白くなりたる夜明け前身を切る寒さただただ寒し

歳末歳始

岡崎 林 伊 佐 子

歳末の山家の庭に羚羊の足跡凍てつく霜解けの泥に

霜柱くずしつつ行く山坂に尾をふりながら鶺鴒とび立つ

ふる里に息子が餅つく杵の音歳末静寂やぶりてひびく

殊の外ことしの寒のきびしさになづなも芹もいまだ稚なし

小雨ふる七草の朝菜をきざみ亡姑より継ぎし伝承まもる

かつてここに生活ありし隣り家に人煙あがらず何か寂しき

過疎のわが村にも時代の変化あり住む人もなく廢家の点在

新しく日の差す元日二日三日餌をもとめに雀むれ寄る

初雪は地にとどかずに消えてゆく雪にこもりし古里おもふ

朝早く目覚めて歌の推敲をしながら嗜むコーヒー一杯

散歩

新城 半田うめ子

野田川の橋の上より眺め居り小学生二人川にておよぐ

寒きなる川風ありて小学生野田川にてあそぶさむき日なりて

野田の駅近くなりてのわが友は行方分らず残念なりぬ

桜の木数本ありたり吾が土地は国道となりて伐られてしまう

散歩する友の後より緑なす日吉の山へ杖をつきつつ

柿の木に今朝も来たりてくず柿をねらひて居りぬからすの一羽

あげは蝶数多に舞ひ居りし数年前現在は一羽も見えず残念なりぬ

西川の川辺を行くなり大きな犬西に向ひつつ吠える事のなし

時折に眺めたりき豊川の金屋公園小鳥の数羽

帽子

名古屋 近藤映子

どこそこと体の不調を言ひたれば薬の数の又も増え

息子より帽子の土産の嬉しくて鏡の前にて何度も見たり

息子等と娘と共に我夫を見舞ひて「今年越し」話せり

年末に息子土産のエンジ色帽子かぶりてニューイヤークンサートへ

年明けて無事なる夫を子等共に見舞いをしたり吾嬉し

「おめでとう」夫の耳元に静かに言えば夫の目しつかり我目を見る

始まりし年と言えども吾の風邪引けば夫見舞へず

昨年辰より巳年となりて十日よと夫に私は伝えたり

雨の降る成人の日の振袖姿袖すそ持ち上げ傘さす姿

外国の街角景色はレンガ色「トレドの街角」と題名の有り

願ひ

春日井 清澤 範子

浴室の窓に雨音しきりなり湯船につかる楽しみながら

今の朝は陽だまり恋しく思ひして朝陽の中に菊に水やる

ガス検針の前日なりき係員の通るまわりの草を取りたり

百日紅背丈を越えて咲きたるも台風の風に散り落ちにけり

庭の蜜柑枝張りて黄に実りたり並べるどうだん赤に美し

八王子神社に願ひかけたくて柝の葉積る境内に立つ

師走に入り神社に詣でる風強く柏手打つ手の冷たかりけり

玄関の陶の鉢に紅白の葉ぼたんを植ゑ新年を待つ

ジュリアンを鉢にたつぷり水を入れ色良く植えたり夫は手早く

安定剤の吾の病の副作用一人風呂にて涙を流す

健気にも

豊橋 胃 甲 節 子

初日の出窓辺に佇ちて待ちます今年の平安祈らむとして

元旦は野鳥の声も聴かずして数多の新聞熱心に読む

眼とじ落つる雨音聞きてをり外に出で得ずしき降る雨音

ともすれば忽ち喘ぐ吾が呼吸横たひて待つ落着く迄を

一番強き風通る場所に健気にも小さきバラは次々と咲く

歌会始の儀粛粛と過ぎてゆく息つめて吾はテレビの前に

瑞々しく細き青葱刻みつつ内藤さんの育てし葱かも知れずと

雪吊りの美しき公園に降る雪の只々真白テレビに見てゐる

何事も無きは一番良き事と決めて此の身を保ちてゆかむ

晴れ渡る東の空を仰ぐ時淡々と八日月見ゆ何故か切無し

花の無き裏庭眺めよく見れば小さき生命の芽吹く紫陽花

枇杷の木の花

沼津 鈴木孝雄

同期会古稀を迎えてそれぞれにあっちが痛いこっちが悪いと

腸の癌近く手術と笑いつつ話している友なんと逞し

房いっぱい白い香りを放ちつつ人知れず咲く枇杷の木の花

白隠の達磨に託す眼力に凝視できずそつと眼そらす

捨石を利用すべしと説かれるも徹しきれずに勝負に勝てず

愛鷹の山にも雪がうつつすらと真白き富士を引きたてにけり

留め金に溢れんばかりの日めぐりはもう隙間見え一月もいぬ

春めいた景色のんびり眺めゆく在来線も楽しからずや

地下鉄に乗るやいきなり席譲られ儒教の教え残るソウルで

河津桜わずかに蕾膨らませ寒波の去るをじつと耐え待つ

隴昆布

蒲郡 杉浦恵美子

我が夫が買ひ置きしたる隴昆布使ひ切りけりこの夕餉にて

得意気に腕組みをして煮麴を我が啜るを夫見て居りぬ

台所戸棚の奥の乾物も夫の縁がひとつずつ消ゆ

戸締りを二度ほど調べいざ出でむ六日ばかりを外つ国へ発つ

五分ほど出発遅る我が旅の始まり誰も咎めはせぬが

凍りたるネヴァ河歩く人が居る厳寒の地の我が旅心

白樺の林の間を夕陽差す月並なれどもこれを見に来た

所詮我島国日本の物差しかロシアの大地に思ひは及ばず

叔母の家閑かに年の瀬過し居り年越蕎麦も要らない叔母さん

珈琲でも飲みましようかと独り言小さき目標達成したから

切り干し

豊川 堀川 勝子

目のあれば物の形は見えれどもうつうつとして現写らず

左目の見えざることに少し馴れ庭の臘梅香を聞きに行く

外出に気の湧かざれば日干しせし青菜でさえもありがたきかな

日干しせし青菜で今朝は汁作る畑に行くさへ気の湧かずして

日干しせし青菜で作りし澄まし汁これもよきかな己れ慰さむ

春を待つ春になればと乞ひ願ふ我の病の落ち着くところ

キンカンの繁みに設へし餌台に今朝は未だ見ぬ番のメジロ

冬晴れの続けば我はためらはず切り干し大根今年も作らむ

大根のみづみづ白妙細細と冬日にかがよひ小山をなせり

この朝も切り干し大根広げ干す仕上がり近きクリーム色に

電子辞書

豊川 平松 裕子

年賀状を書かざりしまま年を越しぬ二〇一三年がしつくりとせず
持ち歩くを常としてゐし国語辞典不器用となりし我の指先

薄紙の二枚を離すもどかしさ使い慣れぬし若き日もありき

電子辞書を使ひ始めて置き去りの国語辞典でしばし遊ばむ

着ることもなきまま誰が手離ししか紫淡き無地の着物

畳紙に包めば高級呉服なり未だしつけのつきぬし古着

ひとり暮らしの寂しさひしと伝はり来歌に詠まるるその沈着さ

食ふことを忘れてはるぬが食ふことの面倒なりと老いし隣人

完成と思ひしものも未完成ほとほと疲れ横たはりをり

我が畑のチンゲン菜の一畝の育たぬままを見て通り過ぐ

財賀寺

豊川 山口千恵子

鉢植のダチュラは青を保ちつつ一月尽のわが縁側に

埃浮く寺池に鯉の動かずして寒き風吹く財賀の寺は

小さき祠立ちたる浮島真中に山裾の池鎮もりてをり

そびえ立つ石段二百七十段一段いちだん登りて行けり

交こもごもに撞ける鐘の音響きみつ男厄除坂を登りてゆけり

山清水細く流るるやさしき音鯉は動かず寺池の底に

財賀寺の冬の陽射し込む本堂にお田植祭の始まるを待つ

本堂に置かれし太鼓の周囲を巡り稲作の過程演じられゆく

背の高さその父を越せりとメールきぬわが少年は高校生に

正月をわが家に過ごし行きたりき中学生は言葉少なく

春きざす光

豊川 小野可南子

湯を落し浄めゆきつつ窓を開く鐘の響きの初めのひとつ

地に響く鐘の音なつかしままならぬ此の年一年の煩惱の鐘

遠く聞く今宵菩提寺の鐘の音家居の我も手を合せつつ

たゆたふが如く鐘の音聞きながら睡りゆくべし明日は良き年

まっ白な機械の中に寝かさるる今し始まるカテーターとは

細き針今我が心臓に届くらし「強く押しします大丈夫です」

もうろうと歩める我におずおずと夫は大きな手を伸べくるる

奥座敷の畳に入り射す冬陽なりあかるく明るく春きざす光

廊の日の明るき中に寄りゆきぬ庭の紅梅まだまだ固く

はればれの光に自づと庭に立つ鉢の小草を爪に引きつつ

我が年末年始

豊川 夏目勝弘

いと硬き今年のワラに手間どりとメ縄作りの予定日過ぎし

新藁の香の染み込みし我が指の今年もなめらかに動きくれたり

会ふ人がワラの匂ひがするといふメ縄作りてひと月余り

我が家のメ縄最後に緬ひあげてようやく無事に一年が終る

家内を動きて落ししワラボコリ吸ひ取り回り新年が来る

隅ずみに溜り積れる枯れ落葉四方の冬木を確かめて取る

年賀状配りきたりし我が正月家居するのもようやく馴れる

正月も昨日の今日ぞ常の日と変はるは一つ雑煮食ふこと

見るでなくテレビの前にゆつくりと酒を飲むのも常と変はらず

とどこほることなく進むは日時のみただ平凡に生きるは難し

雪よ

横浜 阿部 淑子

初春の澄みし青空仰ぎ見てひたすら祈る世界の平和
夫婦にて初詣する幸せにこのひととせも充ちてすごさむ
冬枯れの枝に連なる膨ら雀ご飯粒をベランダに置き
降りしきるぼたん雪の積りゆくカラカラシャベルの雪かきの音
山形の樹氷に飛来すPM2.5環境汚染を融かして雪よ

蝉氷

東京 富岡 和子

葉っぱ落ち広く明るい校内のベンチに語らう女子学生ら
両の手に年越野菜抱えて弓張月は夕べの蒼に
万年青鉢年毎我が家の元旦に過ぎ来し方を思う赤い実
降りはじめみぞれは雪にあれよあれ万両の朱にうつすらの白
「蝉氷」天声人語に読みてすぐ立ちあがりゆく庭の水盤

朝 靄

豊川 白井 信昭

追い風に押さるるやふに足早に西浜大橋頂きあたり
少しづつ夕ぐれてゆく御堂山昨日今日明日姿を変えて
ほのぼのと内なる海の朝靄に大島小島ほのぼのとあり
風強き梅田の浜の海鳥の光のなかを翻りつつ

男泣き

東京 清水 慶章

泣いている僕等の前で男泣きこれまでのことこれからのこと
布団より出たくなかった冬の朝こんもり積る雪に童心
一日が長く感じて過ぎていく偉大な父を身近に感じて
パスを出し自分も走りパスを貰う息をきらして自らを知る

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

初冬の県民の森の道あゆむさくさくの音落葉の葉音

岩瀬 信子

日めくりの残りわづかの日々過ぎるああ一年よ早くも師走か

石田 文子

山道の木洩れ日のなか落葉ふみその音聞きつつ歩みゆくかな

山崎 俊子

受け継ぎし母よりの味の甘酒をわれも造りぬこの年の暮れ

牧原 規恵

ゆづられし席に座りていまさらに己が齡をつくづくうべな諾ふ

三田 美奈子

甘酒に生姜一かけら擦りて飲まむ重き心の溶けてゆくかも

稲吉 友江

いづくよりかモミヂの赤き葉舞ひてくるわが家の塗装のネット外さるる

鈴木 美耶子

言霊の想ひのままに生きたるかさみしがりやの亡きおとうとよ

吉見 幸子

病院に通ひ始めて四ヶ月豊川橋より雪山はるか

牧原 正枝

贈呈誌

冬雷 二月号

嶋田正之

一年の命閉ぢたる鈴虫の土に卵の眠る鎮もり

青森アララギ 三百八十六号

三浦 登

柊 一月号

中村 美智子

長崎の巨大な火柱近々と海をへだてて恐ろしと見き

足元に跳び出す小さき雨蛙晩秋の日に色変わりおり

愛媛アララギ 二月号

大石 ひさえ

柊 二月号

林 勇二

車窓の露をひまはりの形に拭ひつつ少女は外の雨を見てをり

雉の巢の卵のひとつ消えてをり昨日わが手に触れし卵か

鹿児島アララギ 一月号

蓑部 巖夫

群山 一月号

青沼 政子

電車より見る高千穂の峯はいま時雨の雲を脱ぎぬるところ

刈り取りを終へしばかりの田に沿ひて著く匂へる稲の香をきく

高知アララギ 新年号

沢村 多美

榎の木 新年号

浅見 明子

この山に鷹の渡りを見しことも遙かとなりて今日の秋空

この街に住みて幾とせ過ぎしかとせせらぎを聞く瀬戸川の土手

冬雷 一月号

佐藤 邦広

かさね 一月号

米田 文彦

萩の花散りたるあとに藤袴萎れ枯れゆく百花園の冬

立冬や倉庫の壁のひび模様

私の一首

窓に見る稲田はすでに刈り取られ案山子が一つ片向きで立つ

安藤和代

自宅の東側の窓から田畑の広がりが見えます。横一列に並ぶ田は田植えの早苗から色濃く成長していく過程を、そして色づきゆく細かい色の変化、実りの秋と日々楽しませてくれます。黄金の稲田に幸せを感じる私です。今年も昨日迄確かに見た稲が家事を終えてふと見ると黄金の田は黒土に変わっていました。成長した鳥が飛び立つ様にそれは喜びなのになぜか寂しい気持ちになりました。残された案山子の片向きが尚更その気持ちを強くしました。

事も無く新しき年の初日の出吾が窓に拝する朝への期待

胃甲節子

転移した肺癆の為の咯血を昨年と一昨年と繰返し呼吸の苦しさにすぐ喘ぐのですが、家事という仕事の為に酸素をすすめて下さるのもおことわりして、いつ何があっても其の覚悟をする様主治医より云われつつ今を迎えました。新年を迎えられるか？桜の花を見る事が出来るか一人思い悩むのですが、元旦が晴れて初日の出を二階の窓より拝む事が出来ます様にと、祈る思いを。私の一首と致しました。快晴に恵まれた元旦となりました。

相共々仰ぎし西浦の十三夜去りゆき巡り来十年目の十三夜

岡本八千代

今から十年前の名月十三夜が出ていた時の思い出の一首。主人の知人、黄欽安氏（台湾形象派支部長）と丘敏雄氏（副支部長）の二人の方が、わが家に泊られた。私たちは、十三夜の月を愛でながら、高山茶を呑み、夜更けまで語り合った。

十三夜の月は去り、また巡り来て、今夜もその十三夜の光り。無常の感動が浮んできた。かの時、台湾の方々も、短歌に挑戦された。（平成14年、11月号「氷魚」に掲載）

何の穴訝る穴より顔を出す目玉くるくる大き土蛙

内藤 志 げ

畑の中に丸いめずらしい大きさの穴、その穴から可愛いいくくるくるの目玉。土蛙にしては大きかったので大きい蛙としたが、大きさの表現はむつかしい。

見た事のみを文字にしました。いつも余分な事を思い出して歌を作ってしまう。

戦中戦後学生時代から学業とは程遠い時代、短歌に巡りあえ御津先生には何と恥知らずと、お思いになられた事でしょう。私にとっては三河アララギに入れて戴き感謝感謝です。

殺さるるその一瞬に目覚めたり夢の中にも争ひがある

夏目勝弘

今までに見た夢で今でもハッキリと描けるように残っている夢が四つある。

二十歳のころに一つ、平成二十年から三つそのうちの一つが歌の夢である。

生物が人類がこの地球上に現れた時から争いが始まった。

今後とも争いのない世界に終りはない、人類の願いでもあり、願望であっても。

生きてゆく上で他の生命も殺すことなく生きてはゆけない。常に謙虚に反省をしたい。

宇宙間の地球の位置を確かむる初日の光私に来よ

今泉由利

宇宙誕生からはじめての星が出来…そんな遠くの光も見ることが出来るようになった今、その奥ゆきをふまえ、自分なりの宇宙を思い描く。

銀河系の太陽系の…その中の地球の、東京の私の窓に二〇一三年をはじめ朝の陽が届く。朝日がやってくる方向に太陽があり、太陽から八分とちよつと前に出た光が…今とどいた。

身に心に、深く深くこの光と付き合う。

子規の短歌革新とアララギの歌人（9）

佐藤 喜仙

（二）新聞「日本」入社まで

本郷駒込に移転してすぐ、子規は小説『月の都』の執筆に二カ月のあいだ専念した。完成した原稿を、当時新聞「国会」に『五重塔』を掲載中の人気作家、幸田露伴に持ち込みその評を乞うている。間もなく露伴は原稿に手紙を付して返送してきた。その手紙の内容は、

文章はなかなかいいが、小説としては内容を再考されてはいいかだろう、という事で表現は柔らかいが厳しい批評であった。これを機に子規は小説家として立つ事を選びきつぱりあきらめ、以降俳句に専念して行く。二四年十二月に移転した本郷駒込の下宿を引き払い、やはり羯南の世話で、陸家の西隣りに当る上根岸八十八番地の借家に二五年二月二九日に移っている。

明治二五年に作つた俳句は三千百二十一句になり、これは実に前年の六倍である。さらに翌年には四千八百十三句を作り、驚異的な数字を残している。一方子規は、陸羯南が主宰する日本新聞社の新聞「日本」に、明治二五年五月二七日から六月四日まで、六回にわたって『かけはし記』という木曾路の旅を題材とした俳句まじりの紀行文を掲載。続いて「日本」の六月二六日から十月二十日まで、三八回にわたって『瀨祭書屋俳話』を連載した。

これは子規が自分の俳論をはじめて系統的に展開したもので、評判もよく、翌年五月には単行本として出版されている。この成功により、俳句に集中し筆をもって立つという決意を固めたものと考えられる。この後、大学の学年末試験に落第したため大学の中退を考え、日本新聞社への入社を決め、母八重、妹律と暮らすため、二人を郷里松山から東京に呼び寄せた。子規は十一月九日東京を発ち、京都で遊んだ後、十四日に神戸で母と妹に会い十七日に東京に戻り、上根岸の借家に落ちついた。

『俳句』

七草やスーパードで買う寂しさよ

植村公女

母と児の会話弾みし冬の坂

鉛筆を削り揃えて三日かな

囀りも眠れる山を覚ますごと

一石

明暗の入り混じる日や春隣

降雪の気配にそつと書を閉じる

寒月やペン立ての影深かりし

喜仙

荃漬に山河のほひ漬込みて

遠出せぬ我の贅沢年の宿

雪吊りや高層ビルに囲まれて

皓一

石のごと動かぬままに寒の鯉

初めての恋失えり冬の薔薇

「歴代天皇御製歌」(八)

貫名海屋資料館

「顕宗天皇」第二十三代 在位四八五年―四八七年

履中天皇の長子、市辺磐皇子が雄略天皇に殺され、その子、兄億計、弟弘計は逃亡し身を隠したが、清寧天皇の世、身分を明かし、弟弘計は、二十三代顕宗天皇となられた。

身を隠された時のご苦労の経験により「悉ことごとくに百姓の憂うれへ苦くるぶることを知ししめせり」。

「恒つねにまげ屈くかれたるを見ては、四よ体を溝みぞに納なめ、ことくおもほす」と御身に俣たはれ、民衆を愛する政治を執られたと伝えられる。

三十八歳で崩御されると、兄億計は二十四代仁賢天皇になられた。

弟兄、逆転の天皇は、これ以例がない、と伝えられる。

「歴代天皇御製歌」(九)

『武烈天皇』第二十五代 在位 四九八年―五〇六年

武烈天皇、父は仁賢天皇。母は雄略天皇の皇女。武烈天皇には、皇子女なくして継嗣絶ゆるべしと。

「日本書紀」に「頻りに諸悪を造し、一善も修めたまはず」と悪劣な天皇とされるが、厳格な裁判を行った、ともする。物部氏の娘、影媛をめぐって、平群臣鮪と歌垣で争って敗れた、ともある。

「古事記」では、別人の設定になっており本当のことなのかどうか、定かではない。輪になって歌を掛け合う歌垣。

潮瀬しほせの波折なおりを見れば遊び来る鮪しびがはた手に妻立てり見ゆ

波に乗って鮪が流れ着いた、その隣にるのは私の女

太刀たちを垂たれ佩はき立ちて抜かずとも末果すゑはたしても会あはむとぞ思ふ

大きな太刀を持っている。それを抜かなくても彼女は私と会うだろう。

臣の子の八節やふの柴垣とよ下動なみ地なが震ゆり来こば破やれむ柴垣

家来の庭は、堅固に見えても、地震が来れば壊れるような庭だ

ある自然科学者の手記 (10) 大橋 望彦

『論に負けても、理には勝て』(1)

最近、表記の言葉が目に入り、一寸気になった。小生が理学部出身であるからでもないが、いったい何を云いたいのかを考えてみた。正しいことを主張して、たとえ議論の上では負けたとしても、道理の上では負けるでない。と言うことから、どんな理論があるうとも、真理の追究においては勝ち取りなさい。と言っているのであると解釈した。然し、ここでいう理とはどうやら理窟の理であり、理窟と論理とは別のことであると言うことを言いたいらしいのである。日本語はとても難しいものであると思つた。理窟には屁理窟もあり、あたかも正しい理窟があるように見せかけ間違つた理論を展開すること、詭弁に近い。論理の構造は、一貫した理論構成が成立してなければならぬのである。

こんなことを考えていたら、昔から『論より証拠』と言う上手いことを言つた言葉を見つけた。これは上に

書いたことから少し外れるかも知れないが、どんな理窟が在つたとしても、はつきりとした証拠を持つた真理には勝てない。と言う意味で使われている。これは、現代科学のスタンスであり、全てが実証主義で成り立っている。それは科学論文を見れば一目瞭然といえる。科学論文の構成は、先ずこの論文の表題 (Title)、著者 (author)、要旨 (abstract) が簡単にまとめられている。そして本文は、序説 (序論: introduction)、材料と方法 (materials and methods)、実験と結果 (experiments and results)、吟味と考察 (discussion)、謝辞 (acknowledgement)、引用文献 (citation) 等から成っている。この中でも序説で述べられることは、ここで取り上げる研究の目的とこれまでにその背景となつている研究結果やそれに伴う疑問とか、それらから生まれてくる新たな研究課題の意味とかが述べられる。それには生じた仮説まで触れることもある。後は、研究の具体的な記述で、その研究の追試を行う時に再現性のよい条件などが詳細に述べられる。即ち、科学論文では、これまで論じられてきたことを更に新しい観点から論じて、そこに生まれてきた新し

い疑問にどのような解釈を加えれば新しい解決が導かれるかを説いて、その為に行なうべき実験をこのように組んで、ここに新しい結果を得る事が出来た。という記述をして、吟味の上では、もう一度今まで考えられてきたことを見直すと、新しい事実が生まれてくる。と言うことを示すことが論文であり、これはどんな科学関係のノーベル受賞者も同じ道筋を通っている。従って、正しい議論は絶対に必要であるが、それだけでは科学とは云えないのである。それが『論より証拠』となっている。

科学者には研究の自由が与えられているが、なんでも自由に研究出来るかというところではない。『論より証拠』と言うことでその証拠掴みに何をしてよいとはいかない。特に医学関係の研究では、『生命』に関する証拠立てには、それなりの規制が掛かっている。その規制と裏腹に、ジェンナーの示した天然痘のワクチンの実験が世に有名となったが、現代ではジェンナーのようなことを行なうことは不可能に近い。それは、証拠を示すことよりも先に、そのような行為をすること自体に規制が掛かっているからである。

どのような規制があるかという点、人体材料を用いてのいかなる研究も倫理委員会の審議にかけなければならぬ。従って、研究する母体の各機関、大学、研究所、その他企業においては、それに備えた倫理委員会を設立することが国により定められている。ではその倫理委員会の規定は国が決められているのかと言うところではなく、その研究機関が独自に決めていく。委員会の構成も、研究者、医師、社会学者、地域の識者、宗教家、等々である。その組織で、提出された研究の審議がなされるのであるが、なかなか結論が出ないのが通例である。何ヶ月掛かっても結論が出ずに、却下されてしまう場合も多い。これでは小田原評定という他ない。それには一つに、理由があり、倫理とは何ぞや、と言う疑問にはつきりと答えが出せる基盤がないからである。例えば、儒教の教えの如く、孔子の描く四書・五経なる一種のバイブルがあれば、全てそれに照らして、妥当性も測られるかもしれないが、倫理規定なるものはそのようにして出来たものではなく、解決の基盤にならない。これでは、思い切った医学の進歩を望むことが出来ない。

絹の話 (28)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

昆虫食

人類は300万年この方向を食べて進化して来たのであろうか。木の実や木の葉のみを食べていては樹上から離れる事はできません。何でも食べられる消化機能を手に入れたからこそ森から脱出できたのです。

より豊かな食料を求めて広く世界に広がって行ったのでしょうか。これは生きとし生けるもの、昆虫も魚もみな同じですが、殆どの生物には食性が決まっています、哺乳類でも肉食や草食などに別れます。昆虫では蚕が桑の葉を食べ、他の虫は桑を食べない様に、それぞれ消化機能が異なりますので、自分に適した食料の無い所には進出できず生息地が限定されます。幅広い食性の人類は寒暖地何処にでも生活出来るのです。しかし森を失った人々は発展しなくなってしまうのも歴史が語っている通りです。

石器時代以前の人々は寝ぐらや、身に纏う物を作るのに時間が掛かったでしょうが、殆ど食料を求めて行動し

ていたのでしょうか。素手や石器ではなかなか動き回る大型動物を捕獲する事は難しいのです。大勢の知的な連携作業が要求されます。大きな集団になれば更に食料確保が切実になります。ですから、原始の部落は小さな集団が広い範囲に生活する事になります。狩りに出かけてもなかなか思う様には獲物は手に入りません。獲物が無い時は帰り道、石斧で腐蝕木を叩いて昆虫の幼虫を採るのです。まるで木ツツキ人間です。それがごちそうです。

(ニューギニア島の東のニューヘブリデス諸島、エスピリットサント島スモールナンバース族《小さなベニスサック族》での生活体験…1967年)

アメリカの糞考古学者によれば原始時代の食生活の90%は昆虫であったとの報告もあります。

簡単に手に入り美味しく栄養豊富な食料は昆虫の幼虫であった様です。ところが農耕文化が発達して食料の計画生産が始ると次第に昆虫食が減少してしまいました。その名残でしょうか、今でも私たちの間で蜂の子やイナゴは食べられています。昔は蛹も広く食されていたが、昨今の日本では長野県くらいになってしまいま

した。

それでも東南アジアのタイ、ベトナム、インドネシアなどでは野蚕の蛹が好んで食べられています。

タイでは野蚕のエリ蚕の蛹が大変好まれ、生食以外でも各種味付けの缶詰も出回っています。ベトナムはタイの様な食べ方に加えて、糸を吐く直前の黄色くなった幼虫を食べる事が流行して来ました。しかも糸にするより手軽に高収入が得られるとあって、絹屋にとつては困った事態が起きています。インドネシアではアボガドやキヤシユナツツの葉をたべ、時々街の街路樹を丸坊主にしてしまう害虫のクリキユラ蚕（黄金の繭）も蛹が好まれ子供達の小遣い稼ぎに役立っています。捨てられていた繭殻は日本野蚕学会の指導とジョクジャカルタ王室の王女様の出資で絹紡糸、織物工場が設立され、輸出産業に成長しています。

蛹やその幼虫は塩分の無いクリーミーなチーズの様な美味しいものです（タイで試食）。蜂の子の味を知る人にはご理解頂けると思います。人にアレルギーを起こさせなく、血糖値等の上昇の心配無用な高蛋白食品です。

料理研究家により新食材として開発されないものかと思っています。

人類は今日迄、森を切り開いて畑や牧場を作り、海に出て魚も取尽して来ました。さらに増加する人口に対して食料問題は深刻です。今地球は昆虫謳歌の時代です。今日の地球資源で殆ど手つかずの資源は昆虫です。

蚕の様に僅か60日余りで、卵から1万倍にもなる人に優しい高品質の蛋白質を安価（比較：牛、豚、養魚等）に生産出来る物は他には有りません。昆虫を高度利用した人や国が22世紀の食料不足を補い新たなリーダーとなると思います。

人が5千年かけて作り上げた養蚕の技術を今から非繊維にも大いに利用すべき時が来ています。

蚕は人工飼料等今日の技術を駆使すれば、都心のビルの中でも休み無く飼育する事が出来ます。家庭菜園の様に小さな生産も可能です。太陽光発電等が売電出来る様に、小規模と大規模が並んで生産でき、高齢者でも生産に携わり生き甲斐を作ります。また慈しみのある子供達を育むかも知れません。

物理学者と詩歌の世界 (37)

一石

イリヤ・プリゴジン

イリヤ・プリゴジン (Ilya Prigogine: 1917-2003) は、ロシア出身のベルギーの物理学者・化学者。非平衡熱力学および統計物理学の研究で知られ、散逸構造の理論で1977年のノーベル化学賞を受賞。

モスクワに生まれ、1921年からベルギーに移住。ブリュッセル自由大学で化学を学び、1941年に博士号を取得、1947年から同大学の物理化学および理論物理学教授となった。1959年から米国のテキサス大学オースティン校、1961年からシカゴ大学の教授を併任した。2003年ブリュッセルで死去(参考資料1)。

なぜこの宇宙には秩序や構造があるのか? その創造はなぜなされるのか? 自然界ではしばしば生じている「自己組織化」をどう説明すればよいのか? プリゴジンはこのような疑問に答えるべく「散逸構造論」(注1)を展開し、物理学と生物学、可逆な時間と不可逆な時間、秩序と無秩序、偶然と必然など根源的な問題を論じた。

まず、プリゴジンは化学平衡から遠い状態にある溶液について研究をした。溶液が平衡状態にあるときは、温度や圧力などの物理学的性質は変化せず、また物質やエ

ネルギーの出入りもない。溶液の温度を低温から急に上昇させ、化学平衡から遠い状態(非平衡状態)を実現すると、溶液の小さなセルは秩序を保ちながら全体の中を動く。また溶液を冷却しても逆の現象は生じない(不可逆)。こうした非平衡系における秩序形成の仕組みを「散逸構造」という概念により説明した。

これを一般化して、周囲の環境と共存した状態で存在する散逸系において、物質とエネルギーが互いに作用し合ってより秩序性の高い状態になる現象を解析する理論を發展させた。プリゴジンの理論や思想は、物理化学のみならず、社会学や生態学、経済学や気象学、人口動態学の研究にも広汎に応用された(参考資料2)。また物理学の最も基本的な問題の一つである「時間の対称性の破れ」の問題にも取り組んだ(注2)。

著書に、『存在から発展へー物理科学における時間と多様性』、『複雑性の探究』、『確実性の終焉ー時間と量子論、二つのパラドクスの解決』、『散逸構造ー自己秩序形成の物理学的基础』などがある。これらの著作は、幅広く読まれ、科学思想のみならず時代思潮にも大きな影響を与えた。

エピソードと言葉をあげる。

○プリゴジンの多彩ぶりは有名である。プレ・コロンビアン(石器に関する業績により考古学の名誉博士号が贈られている。音楽ではモスクワ音楽院のピアノ科出

身の母親に4歳のときからピアノを習い始め、その後
グヴィッド・アシケナージに師事し、大学入学前に
ピアノ国際コンクールで優勝している(参考資料1)。

○1953年には、国際理論物理学会で来日。全国をま
わって講演し、これからはトランジスタなどの物性物
理学が主流を占めるはずだと予言して若者達を鼓舞し
た。当時、日本の物理学会では素粒子論が主流を占め
ていた。日本にも多くの弟子を育成した業績が称えら
れ、日本政府から勲二等旭日瑞宝章が贈られている。
○進化の未来は予測できません。システムの中のわずか
な「ゆらぎ」が進化の未来を決定してしまうからです。

注1・散逸構造論

ビーカーの水にインクを垂らせば、たちまち拡散し
て決して元の一滴に戻ることはない。古典的な熱力学の
法則によれば、(このインクの均質さの度合いをはかる)
エントロピーは増大し、「無秩序さ」は増す。ところが、
自然界ではこのエントロピーの増大に逆行して「秩序」
が形成される現象がしばしば見られる。一体、どのよう
にして「秩序」ある構造は形成されるのか。プリゴジン
は、内部的にはさまざまな変化があっても大局的には時
間的に一定の流れをもつシステムに注目した。すなわち
エネルギーが散逸していく、定常状態にある非平衡系で
ある。このような系の単純な例は、高温から低温に熱が

流れ続ける現象に容易に見い出せる(例えば、熱いコー
ヒーが室温と同じ状態になっていく過程―熱平衡)。そ
の非平衡系の内部には、ウロコ雲やイワシ雲のように、
「自己組織化」によって新たな秩序ある構造(「散逸構造」
が生まれるというのである)。

注2・力学の基礎方程式は時間の符号を変えても(時間
反転)成り立つ。時間の向きはどうやって生じるのか。
そもそも我々は日々歳を取っているから時間に向きがあ
るのは自明である。しかし、基礎方程式であるはずの力
学の方程式は可逆なのであるから、その不可逆性は考
えると不思議なことである。いったい時間経過を可逆に
していることと不可逆にしていることの間には何が起こ
っているのか。プリゴジンは、この力学系のミクロな可
逆性と熱力学系のマクロな不可逆との間のパラドクスを
著書『確実性の終焉』において論じた。その立場は、物
理学の基本的法則の帰結として古典力学および量子力学
の力学的性質として導き出されるといふものである(参
考資料3)。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア・イリヤ・プリゴジン』
- 2) 北原和夫、『プリゴジンの考えてきたこと』、岩波科
学ライブラリー
- 3) 早川尚男、京都大学OCW「不可逆性と統計力学」

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

〔月虹〕 鮫島 満

八 山口茂吉 3

いささかの雪をとどめて冴えかへる今宵みちのくの
君をしぞ思ふ 同

最上川こめし梅雨ぐも君を思ふわが眼前に見ゆるが
ごとし

蔵王嶺に啼ける鳥が音聴くなべに心はゆらぐ君がふ
るさと

はるばると我の病を問ひたまふ君の葉書を枕辺に置
く

一、二首目には、梅雨時になつてもなお雪の残るよう
な厳しい大石田に暮らさなければならぬ茂吉を案ずる
気持ちに詠まれている。三首目には「(放送)」と註がつ
いている。放送で蔵王の鳥の声を聞いて茂吉のふるさと
である金瓶を思うともうたまらなくなつかしいというの
である。四首目は下句に作者の心が如実に出ている。

冬晴に雪の消えゆくみちのくの便りをもちて恋ひつ
つゐたり 昭和二十二年 同

老境に吾は入りぬと言ひ給ふ何おそれなき君にしあ
れば

午前も寝午後も寝ねつつありといふ君をぞ思ふ心に
もちて

ほかならぬ童馬山房焼跡を一目見たしといふがあは
れさ

わが友と二人は童馬山房の焼けて空しき跡に立ち居
り

病院の玄関なりしあたりより噴く水しろく日なた流
れつ

三首目は想像を越えるまでに老いづいた茂吉を思つて
心を痛めているのである。四首目には「遠友」と註があ
るので「一目見たしといふ」のは茂吉ではなく、五首目
に詠まれる「わが友」である。

汽車降りし君はバケツを提げ持ちていましといふ
逢ひたかりけり 昭和二十二年『鉄線花』

室閉ぢてひとり臥しゐるわが目よりいづる涙は身を
し清めむ

昼床に蒲団をかぶり臥すわれは眼とごつつ君をしお
もふ

君かへり来たたまふ頃を心にも張りたまちうるまでに
癒えゆく

茂吉が疎開先の大石田から帰京したのは昭和二十二年十一月四日であった。作者は病の床に伏せり、上野に出迎えたのは夫人であった。一首目は上野に着いたときの茂吉のようすを夫人から聞いているところである。「バケツ」は茂吉が極楽と呼んでいた簡易便器である。結句に作者の無念さが端的に表れている。四首目の「かへり来たまふ頃」というのは、上野から自宅に着く時間というふうにに解釈したい。

三年経て帰りたまひし君に向ひ時のまわれの言も絶
えたり 同

喜びは涙のごとく吾が身よりにじみて出づる君に對

へば

まぢかくに君とをりつつ三年の空白ありと吾はおも
はず

茂吉が東京の家に帰った翌日、作者は訪問したのである。茂吉は日記に、「山口君来ル、(落涙ナドナス)」と記している。

病む吾を見むと来たまふ君のためドラム鐘の風呂に
湯をたぎらしぬ 昭和二十三年 同
遠くの方見さけてあかざもみぢせる童馬山房焼跡

に居り

君が愛でたまひしカシワ一たびは火に燃えしかど根
に若木樹つ

青山の焼跡を君かへり来て見たまひたりや否やも問

はず

東京に帰り来まして日の浅きうへに吾病めば叱りた
まはず

一首目からは、東京大空襲がまだ復興していない暮らしの一端が読み取れる。四首目からは、茂吉の心を付度している作者の胸のうちを読み取るべきであろう。五首目に「叱りたまはず」とあるが、作者は概して大事にされているとはいふものの、ときに感情の動きによってはひどく叱られてきている。茂吉は作者をしかつたことを反省の意をこめて日記に書いてもいる。

山中にこもりいませば葉書にて吾がをりをりの病状
報ず 昭和二十五年 同

かくのごとく彼岸すぎてよりむし暑き日のつづくな
べに師の君おもほゆ

茂吉はこの年は七月十四日から九月七日まで強羅の山荘にこもつたが、これが箱根行の最後になった。

楽しい時間 4

山本紀久雄

2013年1月30日

2013年の最初の辻照子先生「いーとびあ・料理とマナー」教室の開催は1月12日の土曜日。今日の教室も盛況である。いつものメンバーと笑顔で新年の挨拶をしあう。

14時、事務局の和田さんが登場し「皆さん、改めて、おめでとございます」との一言。いつもながら和田さんの声、透き通った音色で、遠くまで滑るように届く音質である。この声ならカラオケも上手だろうなあーと、勝手に想像する。

辻先生からも同じく新年の挨拶。そのあとに「今月の誕生日の方はおられますか」と尋ねる。誰も手を挙げない。挙げるとアペリティブの乾杯挨拶をするよう指名受けるシステムであるが、どうも1月生まれの方はいないとみた辻先生は、当方をみて「では、山本さんをお願いしましょう」という。

「分かりました」と勢いよく立ち上がると「長老頑張つて」と女性から掛け声。励ましても、冷やかしても受け取れる声だが、一応激励と受けとめ「分かっていますよ」と頷き、話し出そうとして3年前の失敗を思い出す。

あの時のアペリティブはシャンパンだった。料理教室が始まる前、辻先生に「この間トロワ TROYES へ行ってきました」と話すと「ああ、あのシャンパンの産地ですね」といいながら「感想をちよつとお話してくれませ

んか」という。

そこで「分かりました」と、あの時も元氣よく立ちあがり「トロワとは、パリから150km。フランス北東部、シャンパーニュ地方、オーブ県の都市です。行ってみたら街中いたるところからシャンパンが溢れだしていて、手で掬っていくらでも飲めます」と切り出すと「ウソっ」という声。それで「そのとおりです。これは冗談でした」と、それからいろいろ話し始めたら、珍しく厳しい目つきになった辻先生から「山本さん、そこでストップ」と鋭い声がかかった。

この調子では肝心要の料理教室が始められない、と気づいた辻先生の赤信号であつて、その通りなので「申し訳ない」と話は終りにしたことを、今でも鮮明に記憶している。

そこで、今日の新年最初の乾杯挨拶は短く「皆さんのご多幸を祈念して乾杯」ということで終らせたが、3年前の失敗談の後、同じチームになった酒好きで、何故か赤羽駅前が大好きという若い男性から「山本さん、あの話の先をもう少し聞きたかった」とお世辞ともとれるお言葉があり、そういう人もいるのかと少し安心したことも、よく憶えている。

それで、ここで少々よりみちし、3年前に言いたかったことを述べたいと思う。辻先生から、また、お叱りがあるかもしれないが、ここは勇を鼓して挑戦してみたい。というのも、日本文化が外国でどのようにローカライズされているのか。それを皆さんに知ってほしいからである。特に、ここは料理教室であるから、世界での日本

食の受容度事例をいくつか知っておくことも有益ではないかと思うので、3年前に戻って語りたい。

トロワは、木組み造りの家並みが保護・復元され、ステンドグラスが美しいサントマドレーヌ教会やサンピエールエサンポール大聖堂などの歴史的建造物が数多く残っている。

その中心地らしい通りを歩いていると、キッチン用品店のショーウィンドーの中に飾られた包丁らしきものに寿司という文字があることに気づいた。LEKITI SUSHIS とあるから、寿司造りのセット用具であり、価格は19・90ユーロ。左に巻き簀（まきす）、真ん中に包丁、右に箸、左下隅に寿司の絵。ショーウィンドーの正面、一番良く目立つところにおいてある。これは、多分、相当の売れ筋と判断してもよいと思う。

昼食は老舗らしきレストランで、鮭のバスタを食べ、メニユーのデザートを見るとパイナップルのSUSHIとあるので、参考までに注文すると、出てきたものは写真



の通りで、巻き寿司感覚でパイナップルをまいた甘いもの。

このようにシャンパンの地元でも日本食がローカライズされて受け入れられていることがわかった。

以上が、3年前にしたかった内容であるが、この他にまだまだ話す材料はたくさんあるので、ずっと続ける可能性があるから、料理実習の時間がなくなるので、辻先生から赤信号が発せられたのもよくわかる。また、この紙面でも肝心な今日のメニユーを紹介できなくなるので、いずれの機会に譲りたい。

さて、新年最初の辻教室メニユーは以下の三品である。

- ① ポークの味噌風味
- ② シーフードのトマト煮
- ③ ジャコポテト

実習に入ると、みどり監督が黙ってジャガイモを当方に差出す。「ジャコポテト」のジャガイモ皮剥きをしろという意味である。長い付き合いだから言葉はいらない。こちらの実力を知りぬいているから、メイン料理には参加させないというチーム内不文律があつて、それに甘んじている。その上、今日はみどり監督の友人、それもフラダンス仲間という美女二人が参加しているので、さらに当方の出番はなく、ジャガイモ皮剥きの後は「シーフードのトマト煮」の鍋をひたすらかき混ぜるだけ。ただし、かき混ぜながら美女二人から付加価値高き快報を仕入れる。フラダンスの先生が魅力的な女性だという。一度、辻教室に連れて来てもらいたいと願うばかり。こうやって今日も楽しい時間は過ぎていく。以上。

長塚節の病・恋・旅（1）夏目勝弘

明治四十五年以後の長塚節の短歌を形成したのは、病、恋、旅である。

黒田てる子との見合は、明治四十四年の春宵、神田の料亭、その時長塚節は白い包帯を首に巻き風邪と称して絶えず咳込んでいた。

明治四十四年十一月二十一日、木村学士から喉頭結核の宣告をうける。

○我が心萎えてあれや街行く人の一人も病めりとも見す

不治の病と知り、黒田家へ婚約解消を申し入れた。

明治四十四年十二月十四日、節の入院先根岸養生院に黒田てる子が見舞いに来る。

節は観劇のため不在、帰ると鴨跖草色の袱紗と寝巻が、袱紗には手紙があり手紙は赤いインキで書いてあった。

病中雑詠の詞書より（：四たびまで立ち入りがてに病院の門を行き過ぎして、けふ始めてといふに思い設けぬことなれば待たんやもなく、今は悔ゆれども及ばずなりぬ、されどわれは生まれて卅三年はじめて婦人の情味を解したるを覚えぬ、（以下略）。

手紙の内容は、兄の代理で訪ねたこと、身の振り方は父兄の命に従う外はない等々。

そこで節は兄昌恵氏に礼状を出し彼女に再来を乞う消息を出す。

ところが兄の代理ではなく、彼女の一存での独走であったため、以来彼女は家人の要監視下に置かれることとなる。

病中雑詠より

○四十雀なにはさいそぐこにある松が枝にしばしだに居よ

○つゆ草の花を思へばうなかぶし我には見えし其の人おもはゆ

○壁に貼りしいたづら書の赤き紙に埃もみえて春行かんとす

赤紙によき言を書き壁に貼るとするのは子規の「病室」十首のなかの次の一首による。

○赤紙にはひ言書き壁に貼り招ぎたてまつるさちはひの神

一度は妻と思った人からの一通の手紙と寝巻等に、先の見えている節の冷えた心に恋の炎が立ち始めてしまった。

明治四十五年二月二十日退院。七十八日間慰めてくれたのは一株の山茶花である。

○我が思ふ人にあらなくに山茶花は一樹が枝に相隔りぬ

○比の如ありける花を世の中に一人ぞ思ふ其の遥けきも

三月七日帰郷し梅の剪定をする。

○日に干せば日向臭しと母のいひし衾はうれし軟かにして

○あまたあれば杉の落葉のいぶせきに梅の花白しそのいぶせきに
昨年長塚節の生家を尋ねたとき、広い屋敷は杉の原木の林に囲まれ、書斎の前庭などは昼でも暗く、フラッシュで写真を撮った。

詞書に（雨はやがて雪にかはりたれば寒さ身にしむに母と相對して火鉢に手を翳す）

○桑の根の炭はいぶせし火を吹くと皮がはねてる吹かなくてあらむ
三日ほどの予定も少しも母との時間からか上京は三月十八日になってしまった。

上京しまづ正岡家を訪問し、翌十七日夏目漱石を尋ね九州大学の久保博士への紹介状をもらい、十九日に東京を立ち西下。

「氷魚」のことから (146) 岡本八千代

子規の小説、「月見草」について書く。

子規は須磨の保養院に入院して、少しずつ快復してきたので、その須磨浦の美しい海辺を散策するようになった。小説の中の主人公の名前は、勝海正美という男で、年頃二十四五歳。昔の美少年の面影がある。しかし、今は眼うるみ、頬はこけて色青ざめている男。そして、法学士の称号をもっている男として描かれている。展開は一、二に分かれている。

一、一書き出しは「藻汐垂れつつ侘ぶといひし須磨は海水浴の名所と変じて、蜃(海人・漁夫)が焼く煙と見れば汽車の過ぎ行く世の中、敦盛の塚は猶蕎麦屋を残し、古き家の檐端に疎き簾を垂れけるこそせめては昔を忍ぶたよりなれ。」

と、青海、白砂の海岸であった昔が変わった様子を書いている。ある夕方——正美は、後の山に上ろうと林の中や岡の上などあちこちと迷い歩いた末、歩き疲れて、海辺の砂辺に倒れてしまった。日も暮れて、人気もなくなつてしまつていた。そこへ、「何うかなされましたか」と若い女の声があった。女は助けようとしたが、正美はだんだん正気づいてきたので、その好意を断つた。

翌日は外に出なかつたが、その次の夕方、浜に下つた。……彼女の顔も見ず、名も聞かなかつたことが、心苦しく、

よそながら尋ねて見たい思うようになった。

先の日と同じ時頃、東を向いて辿り行つたら、浜辺の波の中に立っている人があつた。

「薄き月の光を片頬に受けて、身動きもせぬ」……

は、たしかにかの少女であつた。疑いながらも近寄つていたら、少女は「人あり」と悟つて、直ちに砂を蹴つて隠れ去つてしまつた。

其後正美は、毎日同じ時刻をはからつて行けば、彼女に逢わない時はないのに、逢わないでいた。——「足もとにちよろちよると寄る波白く音あり」……失望しては帰つた。

次の夜も小雨が降りやまない。彼は浜辺へもゆかなかつたが、面影が浮かんで、その夜はよく眠られなかつた。

翌日、空も美しく晴れて、日は落ちて星が一つ二つ輝き初める頃、例の処へ行つた。——「在り在り、女神は既に在り」と。そして、波の中の女性の描写は——、

「鏡の如き十六夜の月は少女の胸より上りぬ」

「月は今少女の頭光の如く見ゆ。嗚呼、神、神、よも人間にてはあらじ」

と、少女も動かず、正美も動かず。

「月が独り動きて、少女の頭を離るる時雲に入りかかれば少女は見えずなりぬ。」

次の夜もその次の夜も少女の姿は見えなかつた。十日ばかり続けて行つたが、逢うことはできなかつた。

「ついに正美も出ずなりぬ」と。次回へ。

ことのはスケッチ (41) 今泉 由利

『卓球部』

小学校の講堂の隅っこに卓球台があり、校庭も講堂も鍵なご掛かっていたいなかったから、夕焼け小焼け。までの毎日の遊び場だった。

鉄棒、竹登り、雲梯：大好きだった。人間としての基礎体力を養ったのだと思う。

その流れで、中学でも卓球をしていた。高校でも、一応卓球部員だった。男子ばかりが多い高校で、男子、女子話をするということもなく、誰が卓球部に居たのかもおぼろ。学内の中心からうんと外れた兵舎の残骸の床は隙間、ボコボコ、コーチという存在は記憶に無く、ただ自己流に過していた。

そんな卓球経験を終え、時は長く過ぎた。ニューヨークに立寄った時「ピンポン出来るところあるよ」と連れていってくれたのが、言うなれば「ピンポン・バー」だった。

お酒飲みつつの真夜中のピンポンはとっても楽しかった。

日本に帰り、高校の同期の集まりがあった時、「ピンポンする者この指とまれ」と言ってみたら、「やってあげるよ」「卓球部だったんだ」「見には行くよ」と反応があったから場所を探した。

東京都の各々の区で、体育館、スポーツセンター：と立派な施設があり、区民が優先されるけれど、誰でも利用出来る時間帯もある。

関東在住でも、都心から離れたところに住んでいる友が一ヶ所に集まるという現実。

真中あたり港区スポーツセンターから始めてみることにする。

さすが私の世代、遅刻などする人はいない。「ピンポンはしないけれど参加する」「会社の机がピンポン台だったので、仕事を終えるとピンポンをした」と頼もしい友。「四十年振り」は二人。「大阪から東京への出張に合わせた」という友。とにかく始められた。

「すぐ息がきれた」「足がわなわな」「汗びっしょり」……。こんなに動けなくなってしまうていたことにびっくりする。でも「ピンポンだ」と嬉しかった。練習後、反省会と称して飲んだビールのおまかせだったこと。

「これから、ずっと続けよう」と決めた。体調の悪い友がいれば、その地域でピンポンが出来る処を探し、美しい花が咲けば、そこを通り：斯くして「さすらいの卓球部」。

練習後のひと休みには、歌を歌うこともある。昔歌った歌、長くなってしまった卒業後の経験を踏まえた歌。文部省唱歌の、今では使われない日本語の美しさにひたり…。

日本に居なかった年月は埋まり、大切なことが甦ってくる。身体が自由が増し、跳び上がっても、跳ね上っても大丈夫。現在の選手と同じラケットを求め、靴だって卓球用というのがある。オレンジ色の球も、今では目に染みと思う、台にうんと近付いて、攻めの体勢も身につけよう。もうすぐ、今のスタイルの卓球に割り込んでいるだろう。

和菓子街道 (77)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

山科追分を経て進めば、やがて東海道最後の難所・日ノ岡峠にさしかかる。これがなかなか急で、しかも長い。しかし、延々と続いた上り坂もやがて下りになり、商店街に合流する。ここからは、交通量の多い道をひたすら三条大橋に向かって進むばかり。そう思うと先ほどまでの旧道の静けさが妙に恋しくなった。

白川橋にさしかかったところで、最後の寄り道を。かつては京友禅を晒していたという白川に面して佇む菓子屋の餅寅は、明智光秀の首塚を代々守ってきた家柄だ。天王山の戦いに破れて果てた光秀の首は、家臣によって当地に埋葬されたとの伝承があり、店の裏手にその首塚がある。そんな餅寅の銘菓は、明智の家紋をあしらった光秀饅頭。これも街道筋の歴史の味だ。



粒あん入りの黒糖饅頭と白味噌餡入りの抹茶饅頭がある。

さあ、もうひと歩き。約 492 キロの東海道の終着点・三条大橋はすぐそこだ。橋を渡った先には、弥次さんと喜多さんが、待っているはず。

◆餅寅

住所：京都府京都市東山区白川筋三条下がる梅宮町475

電話：075-561-2806

お知らせ

▽四月号の原稿は、三月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△二月号の発送を終えて、ゆっくりと迎えた今朝(月二十七日)は晴ればれと明るい日差しの嬉しい朝です。

皆様の元への発送を終えたという安堵感、そして完全なものとして皆様の満足がいただけたかしらという、チョッピリ不安感も……。

校正に関して、ゲラ刷りと原稿との見間違い、見落し、原稿の読み違い等々。完璧なものを目指している訳ですが、仲々……。
お願いとして原稿は

- 楷書で大きな文字で書いて下さい。
- 難しい読みなどにはルビを付けて下さい。

今後も校正は続けていくことになると思いますが、二層の努力をして参ります。
△三河アラギに六十周年を祝って
お心づかいをいただきました。

岡本八千代様
いーはとぶ会の皆様
ありがとうございます。
(小野)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。
◇会費は、平成十年一月一日より、半々分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半々分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年三月二十五日印刷 第六十巻 第三号
平成二十五年三月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アラギ会
豊川市 御津町 御馬 西 三 七
T E L (〇五三三)七五二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三三九
E-mail yuri88@cronos.oon.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美